



ミドルリーダーの挑戦
—前へ! 前へ!!

教師全員の力を伸ばせるように 校内研究を活性化させていきたい

東京都墨田区立本所中学校 駒田るみ子 54歳



Middle Leader

こまだ・るみ子◎教職歴32年。宮崎県宮崎市立宮崎西中学校に勤務後、東京都へ転居。墨田区立音響第二中学校などを経て、本所中学校に赴任して3年目。担当教科は国語科。主幹教諭、教務主任。

これまで私が歩いてきた道のり

**生徒の目を
授業に向けられず
教師を辞めようと思った**

私の教師人生は、1学年10クラスほどある大規模校で始まりました。国語科には先輩の先生方が8人いて、校内研究を盛んに行っていました。この先輩方に教えていただいたからこそ、私は教師を続けてこられたのだと思います。

新任時の私の授業は、言葉の意味や筆者の考えなどを丁寧に説明するというものでした。そうしないと生徒には伝わらないと考えていたからです、生徒の興味は引き付けられ

ませんでした。私語をする生徒や下を向いている生徒ばかりが目立ったのです。授業がうまくいかない日々が続く、情けなさが募りました。赴任3か月目には、自分が教師に向いていないのではないかと思うようになったほどです。そんな気持ちを先輩に伝えたところ、返答はシンプルでした。「もう1年間頑張つてから辞めても遅くはないよ」と。

この一言で、肩の力が抜けたような気がします。「新米教師なのだから、まだまだ努力しなければならぬ」。そう思い直した私は、時間をつくっては先輩の授業を見学しました。気付いたのは、どの先輩も生徒

にしっかりと考えさせる授業をしていたことです。自分が一方的に説明し過ぎていたことを痛感しました。

校内研究で進めていた、観点別評価を取り入れた指導案作りにも、積極的にかかわりました。私の担当は、3学年分の指導案の原案作りです。自分に出来るだろうかと不安でしたが、先輩方からの期待に応えたいという気持ちの方が強くありました。私が試作した指導案は、先輩に赤ペンでびっしり添削されて返されました。何度も書き直しましたが、私は先輩の指示にただ従うだけでなく、納得がいくまで質問しました。的外れな質問もあったはずですが、どの先輩もじっくり考え、答えてくださいました。

先輩から学んだことは、自分の授業に取り入れました。品詞分解の時には生徒にグループワークをさせるなど、教え込みにならないように工夫を重ねたのです。すると、発言する生徒が少しずつ増えていき、授業に活気が出てきました。私の発問に対してしっかりと考えて答えている様子も見て取れるようになりました。やがて私は、生徒の力を伸ばす授業が出来るようになったのです。

学年を1つにまとめ 教科を横断した 取り組みを企画

30代で学年主任を務めるようになって、担当していない教科の年間授業計画にも目を通す機会が増えました。他教科にも国語の学習内容とかかわる単元があることに気付いた私は、複数の教科と連携し、生徒の視野を広げたいと考えました。そこで、教科の枠を超えて先生方と話し合い、教科を横断した取り組みを企画したのです。例えば、国語の授業で

俳句を学んでいる時、美術の授業では生徒が好きな俳句を選び、その情景を絵にするといった具合です。

最初は消極的な先生方もいましたが、続けていくうちにどの先生方も積極的になりました。「分かった!」という表情を浮かべ、学習に意欲を見せる生徒が増えたからこそ、教師の考えも変わったのだと思います。

他教科と連携して授業をするようになり、私は国語が全教科と深くかわっていると実感しました。日本語の力を伸ばすことは、あらゆる教科の学力向上につながるはずです。

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

若手が積極的に 意見を述べられるように 環境の整備に力を入れる

私は教師になって以来、他の先生方と共に学ぶことで成長してきたと、身をもって感じています。主幹教諭を務め始めた10年ほど前から、校内研究の活性化に取り組みようになりました。自分のスキルアップだけでなく、後輩に教科指導のノウハウ

を伝えるためです。私の経験では、生活指導困難校ほど教師の教科指導力を高める必要があると思います。

本校でも、私は校内研究に力を入れていきます。ただ、今の若手の先生方は、私の若い頃に比べて、自分の考えを言わなくなっているような気がします。話し合いをしていても、ベテランの発言ばかりが目立つのです。私は、若手が発言しやすいように、知っていることでもあえて若手

に質問し、説明を促しています。

教科指導のノウハウは、先生方が意見をぶつけ合ってこそ学べると、私は考えています。若手の先生方から尋ねられたことによって、教科指導の基礎・基本を再確認できたり、生徒の気質の変化に気付いたりすることがあります。若手が意見を言うことは、若手自身にもベテランにも気付きをもたらします。それだけ議

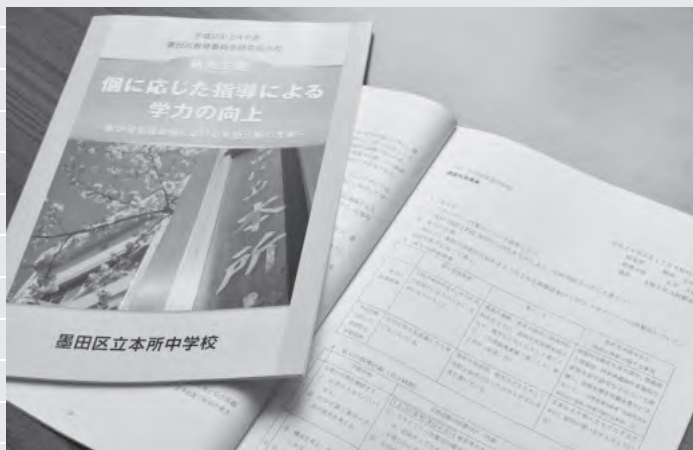
論が深まり、新たな取り組みにもつながるのです。若手の先生方には、見当違いであることを恐れず、自分の意見を堂々と口にする積極性を持ってほしいと思います。

生徒にとっては、教職経験に関係なく、教師は教師です。教師全員の力を伸ばすために、自由に意見を述べられる環境を整え、校内研究を更に活性化したいと考えています。

年1回以上の研究授業

駒田先生の取り組み

◎校内の教師全員に年1回以上研究授業をするように呼び掛けています。取り組みやすくするために、まず私が指導案を作り、これを原案にして各自が指導案を作るように伝えています。評価規準の設定の仕方など、私の指導ノウハウを先生方に具体的に示せるだけでなく、先生方に自分ならどうするかを考えてもらうきっかけにもなると期待しています。



駒田先生が作成した指導案（校内で形式をそろえ、研究テーマに応じた工夫を取り入れてある）。若手教師には「いつでも質問にきてほしい」と伝えている